



名古屋大学附属図書館の防災対策と非常時行動マニュアル

蒲生 英博*

名古屋大学附属図書館

中島敦の「文字禍」という小説をご存知でしょうか。

アッシリアの時代、王から文字の霊の研究を命じられた老博士が、見えざる文字の霊が人間に及ぼす災いを報告するのですが、文字の霊の復讐によって、文化人である王のご機嫌を損ねてしまいます。そして最後には、大地震が起こった時に、たまたま自宅の書庫の中にいた老博士は、壁が崩れ書架が倒れ、数百枚の重い粘土板 (!) の下敷きになり圧死してしまいます。

日常、夥しい文字の森の中にいる図書館職員は、まさか文字の悪口を言って、本に押し潰されることはないでしょうけれど、文字に親しみを持ってもこの地震国では、いつ頭上に本が降り注いでくるかわかりません。

1995年の阪神・淡路大震災では、死者6,000名以上、負傷者40,000名以上の被害がありましたが、地震発生が午前5時46分ではなく昼間でしたら、倒れた書架の下敷きになる人もいたかもしれません。

名古屋大学では、東海地震や東南海地震などに備えて災害対策室を設置しています。災害対策室では、大学としての防災力の強化だけでなく、地域社会における防災協働体制の構築のための実践研究を行っています。また、ホームページでは「学生のための地震防災ガイド」(日本語版と英語版)を公開しています。

大学図書館は大学を構成する一部局ですので、図書館の防災体制などの危機管理体制は、大学全体の中で位置づけられることになります。

名古屋大学および大学構成員に関する事件や事故の対応窓口は、リスク管理室に一元化しています。図書館や各部局は、何らかのリスクが生じたり、生じる可能性がある場合は、できるだけ早くリスク管理室に報告・相談することになります。また、法的な係争や裁判に発展する可能性のある事態については、法務室とも連絡・相談することが求められています。

名古屋大学附属図書館(以下、図書館)では、地震対策だけでなく、大学図書館で想定される危機管理について、2001年から「非常時マニュアル」を作成し、現在では「非常時行動マニュアル」として、平日の時間内用、夜間・休日用、地震対応版などのマニュアルを随時更新し、図書館スタッフ専用のホームページに掲載しています。

主な内容は、非常時の電話帳(大学の守衛室や近隣の病院、建物管理に関連した業者と図書館内の主な連絡網などをまとめたもの)、館内の警報機などが鳴った時の対応、利用者に関連した問題(病人・けが人、盗難、不審者、暴力、痴漢、迷惑行為など)への対応、災害(火災、台風、大雨、地震)への対応、設備・機器の故障・異常への対応、セキュリティ・インシデントへの対応、個人情報漏洩への対応などです。それぞれの項目では、判断の基準と判断者(指示者)を明確にし、フローチャートで行動内容と連絡網が書いてあります。また、このマニュアルとは別に、図書館全職員の非常時連絡網を整備しています。

非常時行動マニュアルの地震の項目では、震度別に地震発生時の行動の概要を明記し、防災体制発動後の行動内容をまとめてあります。図書館では、館長を自衛消防隊長(事務部長を副隊長)として災害対策本部を設置し、大学本部に設置される災害対策統括本部(本部長は名古屋大学総長です)と連絡をとります。図書館職員は、館内への放送などを担当する総務班、利用者の避難を助ける避難誘導・救護班、建物内の安全を確保する警備・工作班、初期消火を担当する消火班の各班に分かれて対応します。

名古屋大学では、毎年10月ごろに地震防災訓練を実施しています。訓練の日、図書館は開館していますが、可能な限り多くの職員が参加し、非常時行動マニュアル、常備してある防災グッズ(防災用ヘルメット、防煙マスク、軍手、手回し発電のラジオ兼ライト兼サイレン、ホイッスル、帰宅支援マップなど)を確認します。防災用として非常食も用意していますが、賞味期限切れ(間近)

*Hidehiro GAMOH : 〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町。

— (2009年3月2日 受理)



となった非常食は、地震防災訓練の関連行事として炊き出し演習で試食し盛り上がります。

図書館の利用者に対しては、震度6弱の地震が発生したことを想定した「地震時における対応」を、日本語と英語により館内放送で説明し、また利用者も参加して、業者の指導の下に救助袋による降下体験訓練を実施しています。学生の人気も高く、30分あまりの時間ですが、毎年40名ほどの学生や教職員の参加者があります。救助袋（斜降式と垂直式）は、3階から5階の各階に複数あるのですが、避難誘導・救護班と警備・工作班がセットします。下の写真は、図書館4階からの降下体験訓練の様子です。

10月とはいえ、まだ半袖の学生もいて、救助袋で擦過傷ができる危険性もありますので、降下体験を安全に実施するため、図書館では腕抜きも準備しています。

図書館職員は、図書館独自で実施する行事のほか、大学の地震防災訓練として実施される消火器取扱訓練、起震車による模擬体験、救命講習（応急手当の講義、心肺蘇生法、AED取扱法、異物除去要領、止血法）などに参加することもできます。AEDは、図書館入口ロビーにも設置してあります。

防災対策に関連した研修は、毎年実施する図書系職員初任者研修の中にも、「図書館における危機管理」として、大学図書館を取り巻く危機、危機管理マニュアル、名古屋大学における危機管理体制などの講義があります。

地震防災訓練は、年1回だけですが、図書館では、年4回ほど「巡視・自主点検の実施要領」に基づいて安全管理点検を行っています。利用者スペースも含む全館が対象です。点検する内容は、室内の整理・整頓・清掃、部屋の出入口・通路・廊下の不要物品の撤去、コンセント・テーブルタップのたこ足配線の禁止、戸棚・書棚・ロッカー等の転倒防止措置、帰宅時の安全確認（火の元、ガスの元栓、水道蛇口、機器類・パソコンの電源、消灯他）など多様です。点検の結果×の付いた危険箇所は改善され、点検表は3年間保存されます。

危機は突然やってきます。予測し難い地震などに対しても、的確で迅速な判断と行動ができるように日頃の訓練や備えが必要ですが、それ以上に、安全・快適な環境を提供し、被害を未然に防ぐ努力がサービス機関としての大学図書館に求められていると思います。

